

主 題：神によるさばき3 バベルの塔

聖書箇所：創世記 11章1-9節

創世記11章をお開きください。今日、私たちは「バベルの塔」についてごいっしょにみことばを学んでいきます。「バベルの塔」については多くの人知っています。少なくとも、聞いたことはあるでしょう？実は、これも神によって下されたさばきの一つでした。いったい、何が起こったのか？何が問題だったのか？どうして、彼らがさばかれたのか？そのことを学んでいきます。

まず、11:1には「さて、全地は一つのことば、一つの話しことばであった。」とあります。この箇所を読むと、10章から読んで来た者にはある疑問を抱きます。なぜなら、10章にはいろいろなことばが存在していたと記しているからです。たとえば、10:5をご覧ください。「これらから海沿いの国々が分かれ出て、その地方により、氏族ごとに、それぞれ国々の国語があった。」と書かれています。10:20「以上が、その氏族、その国語ごとに、その地方、その国により示したハムの子孫である。」、確かに、みことばはいろいろな国のことばがあったと教えています。もう一箇所、10:31「以上は、それぞれ氏族、国語、地方、国ごとに示したセムの子孫である。」と。このように、その当時、国々にはいろいろなことばがあったと書かれています。そして、11:1に「さて、全地は一つのことば、一つの話しことばであった。」と記されています。「一つのことば、」とは「一つの言語」、そして、「一つの話しことば」とは「一つの方言」のことです。すべての人々は同じことばを話し同じ方言を使っていたということです。だから、みなお互いを理解することができたのです。

10章でいろいろなことばがあると言って、11章には「一つの言語、一つの方言」であったというので、「おかしい！」と感じるわけです。実は、今私たちが見ようとしている11:1-9には、いったい、どうしていろいろな言語に分かれていったのか？その理由が記されているのです。かつては一つだった言語が、かつては同じことばを話していた人々が、いろいろなことばを話すようになった、そのいきさつはどうだったのか？そのことを11:1-9は教えているのです。いったい何が起こったのか？見ていきましょう。

A. 場所 2a節

11:2「そのころ、人々は東のほうから移動して来て、シヌアルの地に平地を見つけ、そこに定住した。」。まず、最初に見ていただきたいのは、この出来事がどこで起こったのか？ということです。地名が出ています。「シヌアル」とありますが、どこでしょう？これは、今の地図で見ると、イラクの南部に位置します。バビロニアと呼ばれた地域です。ここはメソポタミアの南部に位置します。そこでこの出来事だとみことばは教えます。このメソポタミアということばは「二つの川に挟まれている」という意味です。皆さんよくご存じのように、そこにはチグリス、ユーフラテスという二つの川があります。この二つの川に挟まれたところ、それがメソポタミアです。その南部、バビロニアと呼ばれたところ、その首都がバビロンでした。今、私たちは現在のイラクの首都、バグダッドを思いますが、このバグダッドと当時のバビロンの位置関係は、現在のバグダッドから南に約80キロほど下ったところにバビロンがありました。今日、私たちが見る「シヌアルの地」はこの「バビロニア」ことです。メソポタミアの南部、今の南イラクでの出来事を見ていくのです。

◎その証拠

今、このシヌアルがバビロニアの一部であったと言いましたが、どうしてそのことが分かるのか？みことばが教えています。

1. ダニエルの記録

一つは預言者ダニエルがこのように記録しています。ダニエル書1:1-2「ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカデネザルがエルサレムに来て、これを包囲した。:2 主がユダの王エホヤキムと神の宮の器具の一部とを彼の手に渡されたので、彼はそれをシヌアルの地にある彼の神の宮に持ち帰り、その器具を彼の神の宝物倉に納めた。」、バビロンの王であったネブカデネザルが神の宮の器具の一部を自分の国、シヌアルに持ち帰ったのです。そこからこれがバビロンであったと見る事ができるのです。

2. 「バベル」の訳

もう一つは、「バベル」ということばの訳です。実は、11:9に「それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。…」とありますが、「バベル」というヘブライ語は旧約聖書中に287回も出て来ます。面白いことは、その中で「バベル」と訳されているのはこの11:9と10:10だけです。10:10「彼の王国の初めは、バベル、エルク、アカデであって、みな、シヌアルの地にあった。」。それ以外の285箇所は

すべて「バビロン」と訳されています。このように見ると、これがどこの地域なのかがはっきりします。余談ですが、恐らく、この地域に「エデンの園」が存在したのだらうと言われていています。みことばはそのことをはっきり記していませんが、記録を見ていくと多分この辺りだらうと言われてます。非常にすばらしいところだったようです。そのことは後で見ます。

ですから、私たちは最初に「バベルの塔」を考えると、それがどこだったのか？場所が分かりました。現在のイラクの南部であったということです。

B. 彼らの選択 2b-4節

次に見るのは、この人たちがどのような選択をしたのか？ということです。もう一度2節をご覧ください。「そのころ、人々は東のほうから移動して来て、シヌアルの地に平地を見つけ、そこに定住した。」と書かれています。

1. 定住した 2b節

人々は東の方からこのシヌアルの地にやって来たようです。では、彼らはどこからここへ来たのでしょうか。今、私たちは11章を見ていますが、10章はいろいろな歴史が書かれています。では、その前の9章には何が書かれていたのか？思い出してください。6～9章は「ノアの洪水」のことです。現在のトルコの一番端に当たりますが、アララテ山の上に箱舟は漂着したのです。この場所は今見ているバビロニアから見ると、少し北西に位置するところ。地図で見ると、バビロニアをずっと北に上がっていくとアララテ山に当たります。人々は洪水の後、そこから移動するのです。「東から来た」とありますから、彼らは南下して来てそこに平野を見つけたのでそこに移ったと見ることができます。

なぜ、彼らはこの平地に留まったのか？「移動して来て…平地を見つけ」とあります。この表現から私たちが想像できるのは、彼らはアララテ山の周辺にいたのです。山岳地帯です。だから、平地を見つけた時、彼らは非常に喜んでそこに移ろうとしたのです。今まで自分たちが居た所と違うからです。洪水の後、彼らはどれだけそこに留まっていたのかはよく分かりません。でも、みことばが教えることは、ノアの一生は950年であったこと、洪水の後、彼は350年生きたということです。その間、彼らはその山岳地帯に居たのでしょうか。洪水の後、人口が増えました。その一部の者たちがそこを降りてシヌアルの平地を見つけて定住したのです。

私たちが忘れてはいけないことは、彼らが移動して来てそこに留まったことにはその理由があったということです。それは、彼らがその平地を見て「これこそ私たちが住みたいところ！」と思ったことです。だれしもそうです。非常に潤った土地でしたから、農耕に適していました。余りにも潤っていたので、野生の麦類が自生していたと言います。家畜には最も適しています。また、気温も非常に温暖でした。最高の土地です。自分たちが考える最高の場所です。ですから、彼らはそこに「住みたい」と考えて移り住むのです。

皆さんよくご存じのように、このメソポタミアで最初の農耕、牧畜が始まったと言われていています。その理由ははっきりしています。非常に肥沃な土地だったのです。

2. 町と塔の建設 3、4節

彼らはそこで何をしたのか？そのことが3節と4節に記されています。「:3 彼らは互いに言った。「さあ、れんがを作ってよく焼こう。」彼らは石の代わりにれんがを用い、粘土の代わりに瀝青を用いた。:4 そのうちに彼らは言うようになった。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。…」と、ここで止めます。よくご存じのように、「バベルの塔」というと人間が塔を建てるのです。

1) 塔の形

どのような形をしていたのか？想像できますか？確かに、みことばからそのことを知ることはできません。でも、恐らく、このような形だったと想像することができるのです。なぜなら、このメソポタミアにはジグラットと呼ばれる宗教建造物がたくさん発見されているからです。人々はなぜそのようなものを造ったのか？このような考えが人々の間にあったからです。それは、神は高いところにおられる、だから、神に礼拝をささげるには山の上に行かなければならない。そうして神に近づくことによって神を礼拝できるというのです。では、メソポタミアを見たときにそのような場所があるかという、ここは平地です。そこで人工的な丘を造るのです。そうすれば彼らはより神に近づいて神に礼拝をささげることができると考え、そのようなものを造ったのです。それをジグラットと呼ぶのですが、その遺跡の発掘によっていろいろなものが見えて来ます。エジプトのピラミッドを想像ください。底辺は四角形です。ジグラットはその上に何層もの階層があるのです。あるものは7階の階層があったと言います。一つの土台を造って、その上にそれより少し小さめの土台を載せて、その上にまた小さめの土台を載せて、7階の塔を造ったのです。そこには螺旋階段があって、人々が登ることができるようになっていて、最上階には祭壇が備えられていたと、このようなジグラットと呼ばれるものが発掘されているのです。多

くの学者たちは、それは恐らく、バベルの塔と呼ばれているものを参考にして造ったのではないかと言っています。ですから、そのような形をしたものを造ろうとしたと考えられます。

2) 塔の素材 3節

驚くべきことは、この塔を造るために彼らが使った素材です。

・彼らは石の代わりにれんがを用い

彼らが石の代わりにれんがを用いたというのは、実は、このバビロニアにはパレスチナのように石が多くありませんでした。パレスチナは石ころだらけですが、ここにはなかったので、建物を建てる時にはれんがを使う必要があったのです。

・れんがを作ってよく焼こう

これはれんがの強度を増すためです。そのような知恵があったのです。興味深いのは、その後です。

・粘土の代わりに瀝青を用いた

「瀝青」とは欄外の注釈では「アスファルト」とあります。私たちは道路に引いてあるアスファルトを連想するので、「そのアスファルト？」と思います。それで調べてみました。日本アスファルト協会というのがあります。そのホームページにはこのような記事がありました。「天然アスファルトが大規模に使用され始めたのは、紀元前3800年頃からで、チグリス・ユーフラテス川流域、現在のイラク地方に栄えたメソポタミア文明や、インダス川流域、現在のインド、パキスタンに栄えたインダス文明の遺跡で、建材、防水材料などに天然アスファルトが使用されていた。」と。使われていたのです。

B. C. 3800年 : バビロニア人が塗料、装飾、れんがや石材を固定する接着剤としてアスファルトを使用

B. C. 3200年 : メソポタミア、インダス川流域で、石材の接着、道路建設、浴場、水タンクの防水、船の防水などにアスファルトを使用

B. C. 3000年 : エジプトでミイラの防腐材料としてアスファルトを使用

「なるほど…、」、それでも「あの道路に使われているアスファルトが？」という疑問は残ります。それは人工的に作ったものだからです。実は、アスファルトには二種類あると言います。

・二種類のアスファルトがある

(1) 原油を蒸留して製造する石油アスファルト : これは私たちが知っているものです。

(2) 天然に存在する天然アスファルト : この11章の記事ではこのアスファルトのことです。先のホームページにはこんな記事もあります。「日本でも実は『日本書紀』の中に出て来ます。天智7年、668年、天智天皇の即位式に『燃える土』として献上された。」と。

天然にあるのです。それを使って彼らはれんがをくっつけるのです。そのことがここに記されているのです。

どこでのことかを見ました。彼らはいったい何をしたのかを見ました。では、何が彼らの問題だったのか？いよいよ核心の部分に入っていきます。

C. 彼らの罪 2、4、6節

私たちは少なくともここに二つの罪を見ることができます。この当時の人々の罪です。

1. プライドの罪 4節

彼らは非常にプライドが高かった。4節にこう書かれています。「そのうちに彼らは言うようになった。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。…」と。最初にここを読んだとき、彼らは天にまで届くような、スカイツリーよりももっと高いものを造ろうとしていたのかと思いました。そうではありません。そのような意味で記されているのではないのです。では、どのような意味なのか？

1) 自分の力を過信していた

この町を訪れる人たち、この町を見た人たちに恐れを抱かせるためでした。皆さんに思い出していただきたいのですが、モーセが12人の斥候を約束の地に送りました。ご存じのように、10人が「上っていきません。巨人が住んでいるから無理です。」と言って民の心をくじきました。それで40年間、彼らは荒野をさまようことになります。そのときにこの10人の斥候たちが言います。申命記1:28「私たちはどこへ上って行くのか。私たちの身内の者たちは、『その民は私たちよりも大きくて背が高い。町々は大きく城壁は高く天にそびえている。しかも、そこでアナク人を見た』と言って、私たちの心をくじいた。」と。人々は「これは無理だ。勝ち目はない。」と恐れます。

同じ申命記9:1にも「聞きなさい。イスラエル。あなたはきょう、ヨルダンを渡って、あなたよりも大きくて強い国々を占領しようとしている。その町々は大きく、城壁は天に高くそびえている。」とあります。だから、人々は恐れたのです。戦ったとしても到底勝ち目は無いと思いました。ですから、このバベルの塔を見た時に、実際に、宇宙の果てにまで届くような建物ではなく、この町を訪れた人たちがその力を見て恐れを抱くようにと、自分たちの力を誇示する目的でこのようなものを建てようとするのです。

問題は何か？彼らは神に頼らなくてもできるとしたことです。彼らの問題は、神の助けがなくても自分たちでやっていける、自分たちはその力がある、自分たちが望むならそれは可能だとするその奢りです。このプライドが彼らの罪だったのです。そのことは4節のみことばが明確に教えています。残念ながら、日本語ではその部分が明確に表現されていません。

* 4節には「～しましょう」という自信に満ちた表現が2回使われている

「（我々は町を）建てましょう」と、「（私たちは名を）あげましょう」という表現です。このことが私たちには可能であると彼らは考えていたのです。自分たちの町とその頂が天に届くほど高い塔を造ることは自分たちには可能である、「だから、いっしょにやりましょう！」と言うのです。人々がそれを見て恐れを為すような、自分たちの力を誇示できるような、すごい町を、そして、その中心に塔を据えましょう、それはできます！と。また、自分たちは努力することによって名声を勝ち取ることができる、自分たちは何でもできる、神の助けなど必要としないと。これが彼らの問題でした。

* ですから、主がそのことを指摘しておられる

5-6節「:5 そのとき【主】は人間の建てた町と塔をご覧になるために降りて来られた。:6 【主】は仰せになった。「彼らがみな、一つの民、一つのことばで、このようなことをし始めたのなら、今や彼らがしようと思うことで、とどめられることはない。」と。これは神にはできないことがある、人間の考えたことに神はどうすることもできないと、そのようなことを言っているのではありません。人間のことです。この当時の人たちが何を思っていたのか？そのことを教えているのです。彼らは、自分たちで考えたことをしようとするなら、必ず、それはできる、とどめられることはない、自分たちの力で達成できるという奢りに満ちた様子を表わしているのです。

私たちのしたいことをするには頑張ればいい、神の助けなど必要としない、それが彼らの問題でした。このようなプライドを彼らは持っていたのです。私たちも気を付けなければ、物事が順調に進んでいるときにそのような誘惑に駆られます。思い出してください。あのイスラエルの民が神が約束された新しい地に入ろうとしているときに、モーセが彼らにいったい何を教えたのか？申命記8章にそのことが繰り返して教えられています。8：11-20「:11 気をつけなさい。私が、きょう、あなたに命じる主の命令と、主の定めと、主のおきてとを守らず、あなたの神、【主】を忘れることがないように。:12 あなたが食べて満ち足り、りっぱな家を建てて住み、:13 あなたの牛や羊の群れがふえ、金銀が増し、あなたの所有物がみな増し加わり、:14 あなたの心が高ぶり、あなたの神、【主】を忘れる、そういうことがないように。——主は、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出し、:15 燃える蛇やさそりのいるあの大きな恐ろしい荒野、水のない、かわききった地を通らせ、堅い岩から、あなたのために水を流れ出させ、:16 あなたの先祖たちの知らなかったマナを、荒野であなたに食べさせられた。それは、あなたを苦しめ、あなたを試み、ついには、あなたをしあわせにするためであった——:17 あなたは心のうちで、「この私の力、私の手の力が、この富を築き上げたのだ」と言わないように気をつけなさい。:18 あなたの神、【主】を心に据えなさい。主があなたに富を築き上げる力を与えられるのは、あなたの先祖たちに誓った契約を今日のおりに果たされるためである。:19 あなたが万一、あなたの神、【主】を忘れ、ほかの神々に従い、これらに仕え、これらを拝むようなことがあれば、きょう、私はあなたがたに警告する。あなたがたは必ず滅びる。:20 【主】があなたがたの前で滅ぼされる国々のように、あなたがたも滅びる。あなたがたがあなたがたの神、【主】の御声に聞き従わないからである。」

人は問題があると真剣に神を見上げます。助けを求めます。けれども、問題がなく順調に進んでいるときは、神なしでもやっていけると思いませんか？こうして私たちが生きているのも神の恵みであり、こうして神が心臓を動かしてくださっているにも拘わらず、私たちはあたかも自分の力で為しているように、自分で呼吸をしているように、すべては自分の力に掛かっているかのように…。すべて神のわざです。だから、神は「気をつけなさい」と言われます。すぐにそれを忘れてしまうからと。すぐに自分の力に頼ってしまう、それが人間だから気をつけなさいと。詩篇97：7にはこのように書かれています。「偶像に仕える者、むなしいものを誇りとする者は、みな恥を見よう。すべての神々よ、主にひれ伏せ。」と。

非常にプライドの高い人たちでした。自分たちの力を過信していました。

2) 神を恐れない

もう一つ彼らの問題は、彼らは全く神を恐れていないことです。4節に「名をあげよう」とあります。自分たちの力で名声を勝ち取ろう、誉れを勝ち取ろうとします。ダビデはエドム人を滅ぼしたときに、実際には18,000人打ち殺したと書かれています。そのときに、ダビデが戻って来たときこのように書かれています。Ⅱサムエル8：13「ダビデが塩の谷でエドム人一万八千を打ち殺して帰って来たとき、彼は名をあげた。」と。なぜ、ダビデは名をあげたのか？大変な勝利を収めたからです。人々はダビデに尊敬を払ったのです。彼を敬ったのです。

彼らは自分たちの努力で、自分たちの行ないでそのような人々からの称賛を勝ち取ろうと思ったのです。そして、それができると彼らは思っていたのです。神に逆らい、神を無視し、自分たちでそれを得

ることができる、大変なプライドです。全く、神を恐れていない、自分たちの力を余りにも過信し、神をこのように見下している、そのような人たちであったと見ることができます。もちろん、みことばはその理由も教えています。というのは、このような一連の行動をリードしたのはだれだったのか？ある人物、名を「ニムロデ」と聖書は教えます。

*ニムロデ

創世記 10 : 8-12 をご覧ください。「:8 クシュはニムロデを生んだ。ニムロデは地上で最初の権力者となった。」と、人々をリードしたのはこの人物です。この平地に移り住もうと働いたのはこの人物です。彼は最初の権力者だったのです。「:9 彼は【主】のおかげで、力ある獵師になったので、「【主】のおかげで、力ある獵師ニムロデのようだ」と言われるようになった。」と、確かに、神がそのようなことをなされたのです。ところが、今見たようにプライドです。「:10 彼の王国の初めは、バベル、エルク、アカデであって、みな、シヌアルの地にあった。:11 その地から彼は、アシュルに進出し、ニネベ、レホボテ・イル、ケラフ、:12 およびニネベとケラフとの間のレセンを建てた。それは大きな町であった。」、彼はこうしてたくさんの町を治め、大きな町を造ったのです。そのような実績があったのです。そこで彼は思います。今度はこのバベルに大きな町を建てて、大きな塔を建てて、人々が自分たちを崇めるようにと、彼はそのように企ててこのような行動に移ったのです。

町を建ててその中心に塔を建てます。そのことによって、最初に話したように、その町を訪問した人たちが自分たちの偉大さに感動を覚えるようにと、ニムロデは自分の力を誇示しようとしたのです。このようなプライドをもった人物が人々をリードし、そして、罪を犯すのです。

2. 不従順の罪 4 節

神のみこころに反する罪です。

1) 留まる選択

彼らは「留まる」という選択をしたことが2節に記されていました。「そのころ、人々は東のほうから移動して来て、シヌアルの地に平地を見つけ、そこに定住した。」と。「定住する」ということは、そこを自分の一生の住処とするということです。これは神に対する反抗を意味します。神は人々にある命令を与えました。

*主は人に命令を与えた

・アダムに対して : アダムとエバが神によって造られた後、創世記 1 : 28 「神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」、「地を満たせ」、つまり、アダムとエバからすべては始まるのですが、神の計画はそこから人々が全世界に広がっていくことでした。その命令をアダムに与えたのです。でも、人間は神に逆らい続けたゆえに、ノアの洪水によってノアの家族以外すべての人は滅ばされました。

・ノアに対して : 創世記 9 : 1 「それで、神はノアと、その息子たちを祝福して、彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。」、人類が滅ばされた後、助かったノアの家族に対して神が言われたことは 1 : 28 のことと同じです。あなたがたは世界に出て行って増えなさいと言われたのです。それが神のご計画、命令だったのです。

しかし、彼らはその命令に逆らいました。彼らは山岳地帯から降りて来て、メソポタミアの平地を見て、シヌアルの地を見て、「この土地こそが私たちが住むべきところ！」と言ってそこに定住したのです。しかも、みことばが私たちに教えることは、彼らはこの神からの命令を知っていたということです。4節の後半に「われわれが全地に散らされるといけないから。」と書かれています。彼らは確かに、命令を聞いていました。全世界に出て行けと言われました。ところが、出て来たものの自分たちがいた山岳地帯よりもはるかにすばらしいところを見つけたのです。「もう他に行きたくない、ここに居たい、確かに、神の命令はあるけれど我々はここに定住したい、そのためにどうしよう？大きな町を建ててそこに住もう、神の計画などどうでもいい、我々はこうしたいのだ！」と。そうして、彼らは神の前に大きな罪を犯したのです。神に従わないという不従順の罪です。

この二つの罪を見たときに、これらは関連しています。どうして彼らは神に逆らったのか？そこにはプライドがあったのです。人々のプライドに満ちた自立心が問題だったのです。神に頼らなくても自分たちでできると。神のみこころに従わなくても自分の考えに従って生きていたなら、そこに十分な幸せを見つけることができる。そのように人々は励まし合って自分たちの思い通りに生きようとしていたのです。そんな人々を神は笑っておられます。詩篇 2 : 2-5 をご覧ください。「地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、【主】と、主に油をそそがれた者にと逆らう。:3 「さあ、彼らのかせを打ち碎き、彼らの綱を、解き捨てよう。」:4 天の御座に着いている方は笑い、主はその者どもをあざけられる。:5 ここに主は、怒りをもって彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。」。

その結果 :

7節からみてください。「:7 さあ、降りて行って、そこでの彼らのことばを混乱させ、彼らが互いにことばが通じないようにしよう。」:8 こうして【主】は人々を、そこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てるのをやめた。」、神が為さったことは、彼らがお互いに理解できないように様々なことばを与えられたのです。このようなさばきを神は下されたのです。

今日、私たちが見て来たこの人々の問題は何だったのか？繰り返しますが、彼らは自分の力に過信していました。自分で何でもできると思っていました。自分が努力さえすれば何でもできると。そのような人はここにおられませんか？自分が努力すれば罪の赦し、救いを得ることができると思っている皆さん、あなたを救いから引き離しているのはあなたのプライドです。できないことをできるとあなたは信じているのです。自分で自分を変えることができないにも拘わらず、あなたはできると思い込んでいるのです。できると信じ切っているのです。「私はこれまでの人生でいろいろな経験を積んでいるからどんなことでも乗り切れる」という、そのようなプライドが今、あなたに祝福ではなくいろいろな重荷をもたらしているのです。

神の助けを求めるなんて弱い人のすることだから私には無関係だというそのプライドが、あなたを神が備えてくださったすばらしい祝福から自分自身を遠ざけているのです。あなた自身が救いを得ないだけでなく、日々の生活において神の平安、神の喜びをもって生きることができないのはどうしてか？あなたのプライドです。自分でできると思っている。それまでの生き方と同じように、信仰においても、信仰をいただいた後も、自分の力でできると思い込んでしまっている、だから、あなたはどんなに時間が経っても変わらないのです。どんなに時間を費やしてもあなたの信仰は成長しないし変わって来ない、それはあなたがいつも自分に頼っているからです。

私たち信仰者は、神の前に「神さま、私はあなたに喜ばれることをしていきたいです。でも、それを実践するためにはあなたの助けが必要ですから助けてください。」といつも助けを求めるのです。「神さま、あなたの助けがなければ私はあなたに喜ばれることを考えることもできないし、それを口にすることもできないし、そのような行動を取ることもできません。それほど私は罪に染まった弱い者です。助けてください！」と。プライドを捨てた謙虚な態度こそ神が喜ばれるものであり、そういう人のうちに神は働くのです。あなたを変えてくださる神に頼るから神はあなたを変えるのです。私たちが自分で自分を変えることのできない自分に頼っているから、いつまで経っても変わらないのです。それは、変えることのできない自分に頼っていることを意味するのです。私たちが学ばなければいけないことは、私たちを変えてくださるのは神だけだということです。私たちはその方に自らを委ねることです。神に働いていただくことです。

この人々の問題、もう何度も繰り返しました。何でも自分たちで出来るとしたことです。そのプライドが神のすばらしい祝福から彼らを遠ざけたのです。創世記を見ると、1章の初めから常に教えられていることは、神は人々にすばらしい祝福を与えようとしたことです。彼らをエデンの園においたのです。完璧なところ。病も死もない、創造主なる神と交わることができ、その方を賛美することができ、最高の場所です。ところが、彼らは思います。これよりももっと他のところにすばらしいものがあるに違いないと。神に従っていくよりも、もう少し自分たちでいろいろな選択をして、自分たちが思うことをやってみることもいいかもしれないと。そうして人間は同じように罪を繰り返して来たのです。

神が私たちに命じておられることは「わたしに従いなさい」です。なぜなら、祝福は神が下さるものです。そのことをみことばは繰り返し繰り返し教えています。でも、人々は神に従うよりも自分の考えに頼って生きたほうがきっと今よりもすばらしい幸せがあるに違いないと思うのです。

自分たちの力に過信して生きたこの人々、彼らの町の名は何となりましたか？「バベル」でした。実は、面白いことば遊び、名前遊びがここで為されています。「混乱」ということばはヘブライ語では「バラル」と言います。このバビロンの町が罪によって混乱した、つまり、バラルが起こった、そこで、この町のことをバビロンではなくて「バベル」と呼んだのです。彼らが望んだのは最高の祝福でした。最高の幸せでした。その代わりに彼らが得たのは「混乱」でした。神の祝福を逃し、その結果、彼らの生活も大変なものになりました。

*主に従う 創世記 12 : 1-3

神の命令はどの場所でもどの時代でも変わりません。「従いなさい」です。今、私たちは11章を見していますが、12章になるとアブラハムのことになります。この当時、彼はまだアブラムと呼ばれていました。12 : 1-3 「【主】はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

神は言われます。わたしが示すところに出て行きなさい、わたしが言うことに従いなさい、そうすればわたしがあなたを祝福する、わたしがあなたの名を上げると。バベルの人たちは自分の力で自分の名を上げようと思いました。できませんでした。できないことを自分の力でするのか、どんなことでもできる神に頼って神の祝福をいただくのか、どちらを選択するのかです、皆さん。主だけが祝福を与えてくださるお方です。主だけが最善を成されるお方です。

人間の大きな罪がありました。しかし、すごいことは11:9を見てください。「9 それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。【主】が全地のことばをそこで混乱させたから、すなわち、【主】が人々をそこから地の全面に散らしたからである。」、彼らは「どこにも行きません。ここに留まります。」と言いました。でも、神は彼らを世界中へと散らしていくのです。神のみこころは成るのです、皆さん。それに従って生きることによって神から祝福をいただくか、それとも、あなたが神に逆らって神の祝福を逃してしまうのか？間違った選択をしても神はみこころを成されます。でも、悲しいことは、そのみこころに従わないことによって、神に逆らうことによって、神の祝福を逃してしまうということです。皆さんはそのような人生を歩んでいませんか？何があっても主に従い続けていますか？主のみこころに従っていますか？主の教えに徹底して従っていますか？それしか、神があなたを祝福するすべはないのです。それが神の約束です。「わたしはあなたを祝福する。わたしについてきなさい。わたしに従いなさい。」と、そうして私たちは生きるのです。そうして生きる者へと私たちは生まれ変わったのです。

確かに、私たちの周りには日々いろいろなことが起こって来ます。だからこそ、変わらない神に信頼を置くのです。不可能な人間や、神でないものに信頼を置くのではなくて、全能なる神に信頼を置いて生きるのです。そうして生きなさいと。

この「バベルの塔」は私たちに大切なことを教えてくれます。あなたは何に頼って生きていますか？神ですか？それともそれ以外のものですか？ここにおられる愛する皆さんが今日から改めて「神さま、私はあなたに従います。だから、どうぞ、私のすべてを助けてください。あなたの助けが要ります。」とそのような歩みをもって神の祝福を大いに頂いていただきたい、そのことを願います。

まだ、この中に神を知らない方がおられるなら、神があなたから遠ざかっているではありません。あなたが神に背を向けているのです。神のところに助けを求めて出て来ることです。神はあなたを生まれ変わらせることができます。この方は全能なる神であられます。

《考えましょう》

1. どうして人々は、シヌアルの地に定住することを選択したのでしょうか？
また、現在、シヌアルの地はどこにあるのでしょうか？
2. 「頂が天に届く塔を建て、名を上げよう」の意味を記してください。
3. 「バベル」の意味を記してください。
4. 「プライドの罪」を犯さないために、あなたはどうすれば良いと思われますか？